地名の由来と善福寺川

◇「永福和泉」の由来

永福町の名は、永福寺からとったと言い伝えられています。永福寺が開創された大永二年ごろは永福寺村と呼ばれていました。万歳山永福寺は曹洞宗の寺で、本尊は十一面観音像。脇侍の不動・毘沙門両像ともに鎌倉期の仏師快慶の手によるものといわれています。

永福和泉地域区民センターの北にある熊野神社から一、二分のところに熊野神社の末社、貴船神社があります。この神社は、山城国（現京都府）の祭神の分霊を受けたものとして伝えられ、慶応四年に当麻小右衛門・茂八郎が奉納した鳥居、社殿、御手洗の小池と呼ばれる約一〇坪くらいの池があります。

かつてはどんな旱天にも涸渇することなく、また雨乞いを行う場所でもあり、豊富な湧水から、地名「和泉」はこの池に由来するともいわれています（杉並区教育委員会案内板より）。

◇地域を流れる善福寺川

善福寺川は杉並区と練馬区・武蔵野市の境近くに位置する善福寺池が水源です。

昔、丘の西にあった善福寺が名称の起源になったといわれる善福寺池は、上池・下池に分かれ、池のほとりには遊歩道があり、大区画整理を完遂し農業発展に貢献した内田秀五郎氏の銅像があります。

また、源頼朝が奥州征伐のとき、干ばつの渇きに自らの弓で穴を掘り、軍勢が渇きのあまり水の出るのが「遅い、遅の井」と言ったそのとき、七カ所から水が湧き出し名付けられたといわれる「遅井の滝」が復元されています。

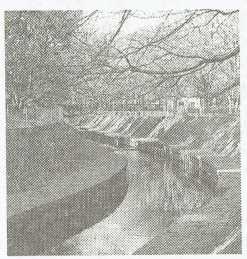
善福寺川は、善福寺・西荻・上荻・荻窪・成田地区などを大きく蛇行しています。永福和泉地域では、大宮・松ノ木・堀ノ内などを流れ、中野区弥生町で神田川と合流し、神田川と名を変え、東京湾に流れ込みます。

成田地区から大宮・和田堀地区あたりは都立善福寺川緑地で、サイクリングコース・野球場・和田堀公園があります。また、交通ルールを教えてくれる杉並児童交通公園もあり、小さな子どもの笑い声で周りを楽しませてくれます。

春には、都立杉並高校近くの天王橋・屋倉橋の上から見る桜が川の両端をおおって川辺は桜一色に染まり、それはそれは見事で眼をみはります。相生橋付近の桜もまた見事です。和田堀公園、御供米橋近くに面した桜は、大宮八幡の杜の新緑と共に川を飾り、一味違う美しさを見せてくれます。

渡戸橋から始まる橋の名を、美濃山橋・寺分橋・宿橋・社橋と追いかけて、由来を考えながら歩いてみるのもおつなものかもしれません。チョッピリ春風にだまされて、幽玄の月といつもと違う町まで歩いて見ませんか。思いもよらない発見があるかもしれません…ネ。

（方南・和泉地域集会施設運営協議会総務部広報）



▲永福寺

2003.8.9(土) 日経

時節探究

トレンド特区

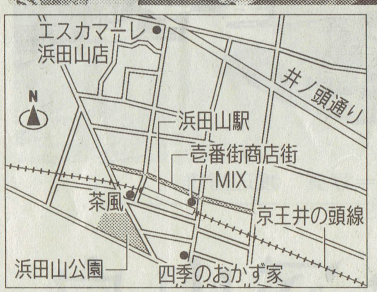
浜田山（東京都杉並区）

和の生活味わえる街

高級住宅地として知られる東京・浜田山は、駅を中心に商店街が立ち並び、アットホームな雰囲気を漂わせている。個性あふれる店をのぞきながら歩くと、落ち着いた街の空気を映すように、和の暮らしを満喫できる。

駅前の壱番街商店街の一角の二階にあるMIX（電03・3303・0709）は和食器を中心に、花器、ランプ、アクセサリーも並ぶ雑貨店。趣のある一点ものの小皿や夏らしいガラス器などの品ぞろえは若手作家の作品。「手ごろな値段で普段の生活で楽しんでもらいたい」という店主の谷果小里さんが有田、唐津、伊万里など産地を回り、発掘したものがほとんどだ。

MIXには若手作家を中心にした和食器が並ぶ



ふらりと立ち寄って眺めていく女性が多い。

線路を超えて南には石畳の、はまなん通り商店街がある。四季のおかず家（電03・3306・7737）は浜田山で育ったという料理研究家の石垣孝子さんが開いて六年目になる手づくり総菜店。毎朝、必ず煮る定番のヒジキはもちろん、ゆば巻き、高野豆腐の肉詰めなど家ではちょっと手間がかかる品も、気軽に買いそろえられる。

「そろそろ小アジの南蛮漬けが食べたいな」。客からのリクエストに「じゃあ明日作りますよ」と応える姿も、評判を呼ぶ。

少し足を延ばし、高級スーパー、エスカマーレ浜田山店（電03・3316・5621）をのぞくと、こちらは和の食材が充実している。大型店ではないが、納豆だけでも黒豆、だだ茶豆など二十六種類。京都・久在屋の地豆腐、築地・江戸一の無添加つくだ煮の数々など、特色のある品ぞろえを眺めるのも面白い。

喫茶スペースがある日本茶の店、茶風（電03・3329・3942）は買い物帰りに一息入れる女性が目立つ。煎（せん）茶、番茶、玄米茶、ほうじ茶、くき茶、抹茶と、今の時期はどれも冷たいお茶で楽しめる。街歩きの後に、お茶のかすかな甘みがホッと気分を落ち着かせてくれた。